

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	江藤真澄
所属機関名	獣医学部・獣医学科
職位	教授
在籍年	8

教育の責任

私は獣医学部獣医学科および獣医保健看護学科において、学部 1 年次の学生を対象に分子生物学および生化学の専門教育を一貫して担当している。これらの科目で身につける知識と視点は、その後に学ぶ獣医学の各分野の理解を支える基盤となるものであり、あわせて学生が早期に科学的思考力を培うための出発点として重要な位置を占めている。また、英語教育委員会に所属、2024 年度には化学教育カリキュラムの調整に携わり、学部全体の基盤教育の体系化と質的向上に貢献している。さらに、大学院獣医学研究科においては研究科長・専攻長として研究科全体のカリキュラムを調整すると共に、自らが担当するゼミナールや特別演習を通じ、研究計画立案から発表までのプロセスを指導し、次世代研究者育成の一端を担っている。こうした役割を通じて、シラバスの更新や科目間の接続の明確化、初年次教育の整合性の確保にも継続的に関与している。

教育の理念

大学教育理念の根幹は、既成の「正答」をただ探し当てるのではなく、正答のない課題に対して最も妥当な解を導き出す力を養うことにある。1 年生春の最初の講義では、まず、Albert Einstein の言葉、The value of college education is not the learning many facts, but the training of mind to think.を紹介している。受験勉強や国家試験は、与えられた選択肢から正しい答えを選ぶ能力を磨く場であるが、社会や研究の現場では「解答が存在しない問い」に向き合うことが多い。にもかかわらず、そのような能力を体系的に養成する教育はまだ十分ではない。私はこの現状を課題と捉え、学生が未知の問題に挑戦し、自ら答えを見いだす姿勢を涵養することを、自らの教育活動の使命と考えている。この力は獣医学のみならず、あらゆる職業や社会的役割において普遍的に必要とされ、臨床現場で予測不能な症例に対応する場面や、研究における仮説生成・検証の場面でも中核を成す。特に、判断の根拠を言語化する力、限られた情報のもとで仮説を立て検証計画を組み立てる力、個別事例から一般原理を抽出する力、そしてプロフェッショナルとしての協調性の涵養を重視している。

教育の方法・方針

教育理念を具体化するために、いくつかの実践的な方法を用いている。まず、講義では関連する動画資料を積極的に取り入れ、抽象的な概念を視覚的に理解できるよう工夫している。また、講義自体も録画し、学生が後日自由に視聴できるようにすることで、繰り返し学習と自己修得の機会を提供している。課題には CBT（Computer-Based Testing）システムを導入し、客観的かつ効率的に知識の定着を図っている点も特徴である。

加えて、学部の一部科目では、授業中に生じた科学的な疑問を次回クラスの冒頭で考察する時間を設け、受け身になりがちな講義を「問いの共有と検討」の場へと転換している。別の講義でのグループワークでは各班にテーマを与え、短い発表と相互評価（ピア・レビュー）を実施し、自分たちで模擬試験問題を作成させることで、理解の深さと説明責任を可視化している。大学院の演習では、発表とピア・レビューを反復することで、研究計画の論理構成・可検証性・実行可能性を段階的に磨く指導を行っている。留学生支援については、自身の 20 年に及ぶ米国での研究・教育経験を活かし、希望する学生に対して学修・生活両面でのカウンセリングを行ってきた。3 年生の専門英語教育では「訳す英語」から「理解する英語」へと転換を

促すカリキュラムを設計し、科学論文を批判的に読み、自らの意見を的確に発信できる力を養成している。

教育の成果

これらの取り組みは、授業アンケートや学生の自由記述からも肯定的に評価されている。たとえば、「動画のおかげで復習がしやすく理解が深まった」「国家試験に直結する内容で実践的だった」「疑問を持ちながら講義を聴けるようになった」「主体的に学べる授業だった」などの声が寄せられている。こうしたコメントは、受け身から能動的学習へと変化できた学生がクラスに含まれていたことの証左である。また、疑問提出→全体討論という短い学修サイクルを繰り返すことで、思考プロセスの共有と言語化が進み、レポートの構成力や根拠提示が明確になってきている。

前職米国トマス・ジェファソン大学においては、学生からの支持を背景に医学部長医学教育賞を受賞した。英語圏におけるこの経験は、教育における理念と方法の妥当性を裏づける重要な証拠である。さらに、研究指導の面でも成果が現れており、学部6年生による学会発表は延べ4回、修士課程1年生で2回、学部3年生でも3回の発表実績があり、そのうち5件は発表賞を受賞している。オープンキャンパスでも紹介しているとおり、早期段階から学会発表につなげる研究指導は、文献調査・実験計画・結果の可視化・口頭発表という学術基礎力の統合的な養成に資しており、学生の思考力、協調性、自己効力感と学修の持続性を高める効果的な教育ツールとして捉えている。

今後の目標

今後は、急速に社会へ導入されつつあるAIなど新しいテクノロジーを積極的に教育に取り入れ、学生がそれらと共存しながら未知の課題に挑戦できるようにしたい。具体的には、生成AIを用いた課題設計において、プロンプト設計・出力の検証・引用の適正化・研究倫理を一体で扱い、「使いこなす」だけでなく「批判的に評価する」姿勢を涵養する。研究科長としては、大学院における留学生受け入れ体制の整備をさらに進め、授業の整備やTAによる学修支援の仕組みづくりを含め、国際的教育環境の充実を図る。同時に、地域貢献教育としては、卒業研究や準正課プログラムを通じて「いきものQOL」プロジェクトを推進し、地域課題を素材としたPBL（Project-Based Learning）を拡充していく。

すでに融合型演習や分野横断型教育プログラムを導入しているが、今後はさらに一歩進めて、学生が自ら研究計画を立案し、実行できる能力を確実に育成することを最大の目標とする。仮説設定—方法設計—再現性の確保—結果の社会的意味づけまでを自力で回せるよう、評価基準の明確化とフィードバックの質を高める。未知の課題に挑む力と、社会に資する研究を遂行する力およびそれを実行するための協調性を併せ持つ人材を送り出すことが、私の教育活動の到達点である。

根拠資料

2024 年度授業アンケート